②肉眼的に同定できる動脈硬化性病変は，10才頃より目立ってくる。
③男性の方が，女性より高い可能性がある。
これらの諸点が，示唆されるが，症例数が少なく，統計的処理に未だ足るものとはいえず，今回の報告では，これらの点が示唆されたにすぎないということを留意する必要がある。

I. Epilepsy 患児の血清総コレステロール値
II. 小腸静脈・大静脈吻合術によって小康を得ている家族性高脂血症の1例

九大小児科 本田 悳
細山田 隆

I. Epilepsy 患児の血清総コレステロール値

1. 対象および方法

昭和53年1月より同年12月までに九大小児科を受診した Epilepsy 患児のうち，薬物血中濃度測定ならびに一般状態経過観察のために採血を行なった516例の血清を利用し，SMA-12/60 を使用して総コレステロール値を測定した。516例全例に GOT，GPT，総ビリルビン，LDH の異常は認められなかった。

対象の年令分布は表1に示すとおりである。

2. 結果および考按

各年令群における男児および女児それぞれの血清総コレステロール値の平均と標準偏差を表2および図1に示した。

1才未満および1才から3才未満群で女児が男児より高値を示し，幼児期後半から学童期にかけて浅い谷を形成するが，各年令群間ならびに男女間に推計学的有意差は認められなかった。516例の総コレステロール値は176±28 mg/dl であった。

正常小児の血清総コレステロール値は未だ確定していないが，我々の持つ正常群のコレステロール値と，今回の値との間に明らかな有意差はないが，全年令群とも，epilepsy 患児でやや高値を示す傾向が認められた。但し，我々の正常例は各年令群の検討例数が少数であるため，今後正常群の測定値を増す必要がある。

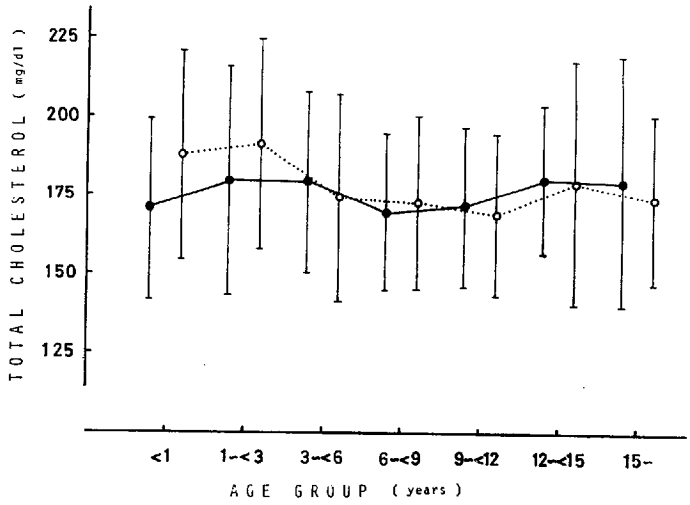
他施設からの血清コレステロール値との比較は，測定法，精度などの点から単純比較が不可能であるが，今回の数値は全般的に高値を示しており，中学生以降の年令

表-1 MATERIAL

age group (y.)	<1	1-<3	3-<6	6-<9	9-<12	12-<15	15-	total
male	15	21	34	66	52	28	31	247
female	19	20	61	53	44	45	27	269
total	34	41	95	119	96	73	58	516

表-2 Total Cholesterol in Epilepsy

age group	<1 y	1～<3 y	3～<6 y	6～<9 y	9～<12 y	12～<15 y	15 y ≦
male	172.0 ±24.8	180.1 ±23.6	179.6 ±39.8	170.8 ±28.7	179.6 ±36.4	179.3 ±28.8	169.2 ±24.7
female	169.6 ±25.5	179.0 ±38.4	173.7 ±26.8	187.0 ±33.2	191.3 ±33.6	174.2 ±33.0	172.8 ±27.6



群における総コレステロール値の男女差がないことが特長と推察される。

なお，今回の epilepsy 患児の総コレステロール値が 200 mg/dl 以上を示す症例の頻度は，0～1才未満群34例中8例，23.5%，1～2才群41例中12例，29.3%，3～5才群95例中24例，25.3%，6～8才群119例中18例，15.1%，9～11才群96例中18例，18.8%，12～14才群73例中17例，23.3%，15才以上群58例中14例，24.1%，全体として516例中111例，21.5%と高頻度である。

今回対象とした症例は，全例 Phenobarbital 剤を使用しており，約60%は phenytoin を投与されている。これら抗痙攣剤の投与は血中総コレステロール値を上昇させるとされているが，その長期投与と総コレステロール値の変動，ならびに，その生態への影響は未だ十分な検討がなされているとはいい難い。今後，正常例，抗痙攣剤投与群ともに，症例数を増すとともに，各種の計測値の変動との相関を検討していく必要があろう。

II. 小腸静脈・大静脈吻合術によって小康を得ている家族性高脂血症の1例

1966年10月11日生，男児。

2才のとき左膝蓋部に xanthoma 出現を気付いたが放置。6才のとき某医にて高脂血症を指摘されて当科受診，精査の結果 Fredrickson II-a 型高脂血症と診断された。

7才時には，右頸動脈部に収縮期雑音を認め，運動負荷にてII，III，aVF，および左側胸部誘導の ST 低下を認めている。さらに，9才時には，安静時心電図にも ST 下降を認めるに致り，同年心カテ，心血管造影の結果，右内頸動脈，右鎖骨窩動脈および左冠状動脈起始部に狭窄を認め，1975年12月 meso-caval anastomosis 施行。

以後，血清総コレステロール，トリグリセライドともに術前値の約2/3まで下降し，xanthoma 縮少し，安静時心電図の ST 変化消失し，小康を得ている。

1978年11月に施行した心カテ，アンギオでは，左冠状動脈起始部の狭窄は80%から50%に減少し，左室収縮能は正常であったが，右内頸動脈，右鎖骨窩動脈の狭窄は改善していない。

Fredrickson II-a 型高脂血症は，常染色体優性遺伝形式をとる疾患であり，比較的早期に皮膚，眼，循環器系に異常をきたす疾患として知られており，諸外国では，冠状動脈の閉塞性病変と狭心症発作をきたした症例の報告が相次いでいるが，本邦での同症小児例の冠状動脈所見についての報告は少ない。

高脂血症の一典型例である本症の循環器系に及ぼす影響を知ることは，他の高脂血症例での知見に役立つものと考えられるので報告した。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

1・対象および方法

昭和 53 年 1 月より同年 12 月までに九大小児科を受診した Epilepsy 患児のうち,薬物血中濃度測定ならびに一般状態経過観察のために採血を行なった 516 例の血清を利用し,SMA-12/60 を使用して総コレステロール値を測定した。516 例全例に GOT,GPT,総ビリルビン,LDH の異常は認められなかった。